

令和元年度 日本大学文理学部個人研究費 研究実績報告書

所属・資格 社会福祉学科・助手

申請者氏名 張 珉榮

研究課題		認知症の人の社会参加と支援のあり方に関する研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>研究の全体像は、認知症の人の社会参加の現状を明らかにし、その支援のあり方について考察することを目的とする。申請者は、認知症当事者の視点に着目し、本人への聞き取り調査を行ってきた。その結果、認知症に対する偏見が認知症の人の社会参加を妨げていることが明らかになった。また、認知症の人が地域社会と何らかの関わりを持ちながら認知症当事者の声を社会に発信していくことが、偏見をなくす有効な方法となる可能性が示唆された。しかし、認知症の進行程度によっては、可能な活動が限られ、活動に参加できなくなることもありうる。症状が進行した際には、進行程度に合わせた適切な社会参加のかたちで関わるように支援することが求められる。以上のことを踏まえ、本研究は、社会との関わりが切れることなく、認知症当事者一人ひとりに合わせた適切な社会参加のかたちを探ることを目的とする。そのためには、社会参加の再定義が必要であることから、本研究では先行研究のレビューを行った。</p>
	研究の結果	<p>社会参加については、明確な定義を示している研究が少なく、様々な概念や操作的定義が行われている。大きく分類すると、インフォーマルな社会参加とフォーマルな社会参加に分かれるが、何らかの組織的・集団的な活動への参加というフォーマルな社会参加の共通理解が多い。一方、親族や友人との私的な対人交流のようなインフォーマルな参加も、社会参加として捉えられている。認知症の人の適切な社会参加を考えるにあたっては、進行程度によって、インフォーマルな社会参加とフォーマルな社会参加の両方の概念を用い、広義の社会参加として捉えることが求められる。</p> <p>このことから、認知症の人の適切な社会参加について、「何らかの組織・集団で行う活動及び私的な対人交流に自発的に参加すること」と再定義した。</p>
	研究の考察・反省	<p>社会との関わりが切れることなく、認知症当事者一人ひとりに合わせた適切な社会参加のかたちについては、上記の再定義から考察することが求められる。また、再定義にある「自発」の意味については、社会参加における認知症の人の意思決定に関する考察も必要となるが、本研究ではそこまで至らなかった。認知症の人の社会生活における意思決定について、認知症の症状にかかわらず、本人には意思があり、意思決定能力を有するということを前提にして、意思決定支援をすることが重要である。</p> <p>社会との関わりが切れることなく、認知症当事者一人ひとりに合わせた適切な社会参加のかたちについて、再定義に基づいて今後引き続き考察していきたい。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>学会名 せたがや福祉区民学会 担当分科会 ひとり一人に向きあった実践（進行及び助言者） 年月日/場所 2019年12月7日 / 日本大学文理学部</p>	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者		